

智顗の一即一切義

秋田光兆

智顗における一即一切の思想は、「一念三千」、「十界互具」というような教義と共に述べられることは、よく知られていることである。また、それは端的にいえば、後の華嚴教学で云う事々無礙とか、般若の一心万行の意であると云われ、最終的には円融三諦によって一即一切の相即の義が成立すると論じられるが、本稿においては、法の有り方、いわゆる諸法（一切法）の有り方を「一即一切」の思想を通して、自己においてどのように有るかを、認識する点について考察してみたい。

すなわち、一即一切は、心の方面から云えば、「心、一切を生ず」とか「心、一切を具す」と、いうふうに述べられるが、諸法の有り方の見方としては、まず三蔵における折空観を通して見れば、止観三下に明して、

麁細色等從_レ無明生。無明不_レ実故麁細皆假。假故無常無性即得_レ入_レ空。又介爾心起必藉_二根塵_一。無_レ有_二一法不_レ從_二緣生_一。從_レ緣生者悉皆無常。（④46、三二b）

と述べ、一切の法は、無明より生ずるものであり、縁より一切法が生ずると説き、無明という原因より生ずる相関係であり、念念に相続して生ずることを明かすが、この様に有る法を実法と見て正折することによって真理を得るのであるから、理は事を離れた所に有るとするのであり、ここには相即関係が有るとは云えない。次に体空観を明す中、止観三下に、

今大乘体意名実皆假。自相是空本来虚寂。譬如_二鏡柱本自非_レ柱。不_レ待_二柱滅_一方空_一即_レ影是空。不_レ生不_レ滅不_レ同_二乙実柱_一。（④46、三二b）。

と、一切法を滅して真に入るとする説を否定し、一切の諸法がそのまま空理となることを云うのであり、ここでは一切が主体者に有ることをいい、一切が一心に具わる面を主張されるのである。さらに、「二端の麁を觀するに、即ち十八空を具す」と、事に一切の理を具すことを述べる。

また玄義二上に、隨理の三仮を明して、

二若隨理三仮。一切世間皆如幻化。即事而真無有_レ二事而非真者。更待_レ何物_レ為_レ不真耶。望彼三藏_レ絶還不_レ絶。即事而真乃是絶待。此通教絶待也。(④33、六九六c—六九七a)

事の当体とそのまが真であることをいうのである。同じく思議不生不滅の十二因縁を明す中に、「癡は虚空の如く、乃至、老死も虚空の如し、無明は幻化の如く不可得なり。……癡は真実を謂へり、智は真に非ずと知る。無明は六道の依正を幻出す。」と、事を離れることなく、対象の当所において理に入るとする一切即一の意を表わすのである。

以上も、心との係わりを除いて説かれる分けではないが、ことさらに強く、一切が心より生ずると主張するのが、不思議生滅の因縁であり、「華嚴經に云わく、心は工なる画師の如く。種々の五陰を作る。一切世間の中に、心より造られずということ莫し。」と、心より一切法が生ずることを云う。

さらに、地論、撰論の意を用いて、この心が、「阿黎耶は是れ真識にして一切の法を出す。」或は、「阿黎耶は是れ、無没識なり、無記無明にして一切法を出す。」と、通数に空理を体得した後、心より一切法を生ずるを、地論では「心より一切が生ず」、撰論では「無明より一切法が生ず」と云うと主張するのが別教の意である。

この意に対して、止観五上に、地論の「法性を依持」撰論の「阿黎耶を依持」とし、一切法を「生」「具」とする観点

からの論究に対して智顗は、

此爾師各執_二一_レ辺_一。若法性生_二一切法_一者。法性非_レ心非_レ縁。非_レ心故而心生_二一切法_一者。非_レ縁故亦_レ應_二縁生_二一切法_一。何得_二獨言_二法性是真妄依持_一耶。若言_二法性非_レ依持_一黎耶是依持_一。離_二法性_一外別有黎耶依持_一。則不_レ闕_二法性_一。若法性不_レ離黎耶_一。黎耶依持即是法性依持。何得_二獨言_二黎耶是依持_一。(④46、五四a—b)

と述べて、不思議生滅の因縁によつて、一切法が一に具なわるとする「從仮入空」と、一から一切法を生ずると考えられる「從空入仮」の両面を接しながらも、両師は一辺に拠ると、法性、無明のどちらにも片寄らないことを智顗は主張し、ある状態の心をさすことも許さないわけである。

この「無明」、「法性」より一切法が生ずるとすることに關して、止観六下の破法編においてさらに詳しく論じられるのである。すなわち、

一觀_二無明_一者。空仮之智与_レ心相応。觀_二此二智_一為_レ從_二法性_一生_上。為_レ從_二無明_一生_上。為_レ從_二法性_一無明合_二生_上。為_レ從_二離生_一。若從_二法性_一法性無生。若從_二無明_一無明不_レ実。亦不_レ闕_二中道_一。若合共生則有_二二過_一。若從_レ離生則無_二因縁_一。中論云。諸法不自生云云。如是広破如_二上因成中説_一。(④46、八二a)

と述べて、一切法の生ずる原因を「無明」「法性」などに特定することを否定するのであり、ある一方に固定しての考えを破捨することによつた理を知れば、空仮の智と、心が相応

して、中道実相を感得するのである。

さらに法性を観じて、

即当_レ移_レ觀觀_二於法性_一。為_レ当_二無明心滅法性心生_一。為_レ当_二不_レ滅法性心生_一。為_レ当_二亦滅不滅法性心生_一。為_レ当_二非_レ滅非_二不滅_一法性心生_一。(④46、八二b)

と、無明の心の滅、不滅、亦滅亦不滅、非滅非不滅にして法性の心の生ずるのであるかと、以下四句に分別して、法性と無明との前後相統して生滅する間に一切法の生ずることを認めない立場を明らかにするのである。

さらに、真修、縁修に約して無明を破すとは、横には、十万の諸仏の明に対して、現在の我に智明無く、豎には、将来に盲冥を破して大明を得るに對し、今は智明無く明無きに相対する智明を、

如_レ是智明為_二是縁修_一。為_二是真修_一。真縁合修。離_レ真離縁。……
釈_レ此有_二兩家_一。一云。縁修顯_二真修_一。二云。縁修滅_二真自顯_一。(④46、八二b)

四句に分別して示すが、相待して相依関係にある有り方、縁修が真修を表わすという関係を、これ以下四句に分別して天台円教の立場から、絶対的な原因と結果を想定している点を指摘して不可とするのである。以上ここに否定される教説は別教の所説であるから、この不思議生滅の因縁を越えた所に、円教の不思議不生不滅の因縁があるわけである。それ故

に(1)ある原因を想定したもの、(2)次第相統してあるとするもの、(3)特定の原因と結果に結びつけられた有り方の三点を越えた所に有るとすることは明らかである。

その様相とは、先に挙げた「無明」「法性」は、心のある状態を指すものであるから、ここでは、そのような媒介的な心の存在を除いた面において成立している考えることは可能である。正に、止観五上に、「心は是れ一切の法、一切の法は是れ心」(④46、五四a)と述べるは、そのことである。

さらに、止観一下に、

次根塵相封。一念心起即空即假即中者。若根若塵並是法界。並是畢竟空。並是如來藏。並是中道。云何即空。並從_レ縁生。縁生即無_レ主。無主即空。云何即假。無主而生即是假。云何即中。不_レ出_二法性_一並皆即中。當_レ知一念即空即假即中。並畢竟空。並如來藏。並実相。(④46、八c)

と述べ、根塵相對して一念が起ると同時に法界であり、畢竟空、如來藏、中道、実相であるとし、一念心と一切法の同時性が強張されるのであり、そこには、相統や、原因と結果の関係は見られないのである。また、三諦は同時に具わり、その三は巡る様相を示めすのである。さらに、これを理解すれば、「根塵一念の心起るに、根に即ち八萬四千の法蔵を具す。塵も亦た爾なり、一念の心起るに亦た、八萬四千の法蔵あり。」と、根にも一切法、塵にも一切法を具すことが明らか

にされるのであり、これは後の華嚴教学で云う事事無礙の思想を示めすものである。以上、天台の云う一即一切とは、媒介とする心無くし、特に一と一切との同時性を強調する点に特徴があり、それ故、根、塵にも一切法が有るとする事事無礙を示めすことによって、凡夫の一心に一切法が具わることも主張することができるのである。

そのことは別な言い方をすれば、通教に「無明の体相は本より自ら有ならず、妄想の因縁和合して生ず。」と、事の空なることを体得して理を表わすことや、別教の「無明若し破すれば般若を顯出し、業破すれば解脱を顯出し、識、名色破すれば法身を顯出す。」と主張するのは異なり、円教における事に即して理を表わす「事」とは、

不思議不生不滅十二因縁者。為利根人即事顯理也。(43、

七〇〇a)

と利根人のために、事に即して理を顯わすのであるが、

煩惱道は、即ち是れ苦提なり。

業道にして、即ち是れ解脱なり。

苦道にして、苦は即ち法身なり。

と、事即理の事を指すのである。また同じく無作四諦の中、即事而中を明して、「煩惱即ち苦提」「生死即ち涅槃」(43、七〇一a)といわれる事を指し、また如来が衆生の苦を抜くに、

若觀未悟重起慈悲。此理寂靜而衆生起迷。無明戲論翳如来藏稠煩惱林。是故起悲拔根本重苦。又無明即法性煩惱即苦提。欲令衆生即事而真。法身顯現。是故起慈与究竟樂。(44、一三一a)

と述べられ、如来蔵を覆う煩惱を「無明即ち法性」「煩惱即ち苦提」といわれる事を指すのである。すなわち、円の事とは理事無礙の事をいい、その事に即して理(真、中)を顯わすというのである。それ故に理論上、後の華嚴教学という理事無礙から事事無礙の世界へと進むのと同様な過程を示めすのである。

1 参照 石津照蜜著『天台実相論の研究』、佐々木憲徳著『天台教学』、日比宣正著『唐代天台学研究』

2 法華玄義二下(大正三三・六九九B—C)

3 法華玄義二下(大正三三・六九九C)

4 摩訶止観五上(大正四六・五四A)

5 智顗の一切法の生じ方、有り方という観点から、新田雅章氏「天台教学と縁起の思想」(平川彰博士古稀記念論集『仏教思想の諸問題』所収)参照。

6 多田孝正氏「即時而真」について(『天台学报』第十七号)参照。

(大正大学総合仏教研究所研究員)